若年女性の家庭志向は強まっているのか？ ——女子学生のライフコース展望における 10 年間の変化——

Has the desire of young women for a home-oriented lifestyle increased?:
Examination of changes in life-course perception of
women students within this decade

谷 田 川 ル ミ
YATAGAWA Rumi

This paper examined how the life-course perception of women students has changed during this decade particularly due to the influence of socio-economic conditions. Using survey data from students at seven universities performed in 1997, 2003, and 2007, life-course perception changes in women students were examined and compared. The results are as follows: 1) The life-course perception of women students shifts from a work-oriented focus to one of desire for a home-oriented lifestyle in 2007 when compared to 1997 and 2003. 2) Even if the major contributing variables, such as university, department, and educational background of parents, are controlled, a rise in the desire for a home-oriented lifestyle is still observable. In 2007, the Japanese economy was in a comparable condition to 1997 and 2003, with a high rate of employment of graduating university students. Surprisingly however, the phenomenon in which women students' life-course perception changed from one of "work-oriented" to "home-oriented" has occurred.

1. はじめに

本稿は、1997 年度、2003 年度、2007 年度の 3 時点にわたって行った大学生を対象とした調査から、この 10 年間ににおける女子学生たちのライフコース展望の変化を、社会経済状況の変化を加味しながら、属性、過去の活動、現在の大学生活といった側面から、多角的に読み解いていくものである。

本調査の行われた 1997 年から 2007 年までの 10 年間の日本の経済状況を概観すると、「失われた 10 年」と呼ばれた空前の不況を経て、景気の底であった 2002 年前後に境に景気が持ち直してきた時期にあたる。こうした社会経済の変化に伴い、調査対象者である女子学生たちは、2000 年前後までの「氷河期」と呼ばれる就職難を経験し、その後の景気回復とともに、就職状況が持ち直すという、変動の大きな時期を過ごしてきたことになる (図 1)。

女性のライフコース展望を分析するに際しては、結婚、とりわけ出産というライフイベントを想定せざるを得ない⁽¹⁾ ため、性別役割分業といった家事育児にかかわるジェンダー意識との関係からアプローチされることが多かった。しかし、近年においては、大半の女子学生は、大学卒業後は職業に就くことを希望している。そのため、将来の結婚や出産といったイベントを含めたライフコース展望を考えるにあたっては、「就職」も重要な案件となっ

図 1 大学生の就職 (内定) 率の推移 (4 月時点)

ているものと考えられる。したがって、現代の女子学生のライフコース展望を分析するにあたっては、就職にかかわる社会経済状況の変化も加味する必要がある。

これまでも、若年女性のライフコース展望や性別役割分業意識の年次変化を追った研究はいくつか見られており、いずれも近年において、若年層の女性の家庭志向や性別役割分業の支持の増加といった「保守化」現象が報告されている〔松田 2005、元治・片瀬 2008、山田 2009 など〕。しかし、これらの研究は、景気後退期の中にある若年女性の意識の変化を追ったものであるため、こうした若年女性の「保守化」現象は、不況による堅実志向という解釈に回収されたままとなっており、「失われた 10 年」の後、経済や就職状況が好転へと向かっていく時期における若年女性の意識の変化を検討するには至っていない。

そこで、本稿では、不況期の 1997 年、不況の出口に当たる 2003 年、景気上昇の途にある 2007 年といった景気変動を表す象徴的な 3 時点のデータを用いて、女子学生のライフコース展望が 10 年間でどのように変化したのかを、社会経済状況といった構造的な側面と性別役割分業といった意識の側面の双方からアプローチしていく。

2. 先行研究と分析課題

(1) ライフコース展望の年次変化の研究

これまでも、若年女性を対象とし、ライフコース展望や性別役割分業意識の年次変化を追った研究はいくつか見られている。

松田〔2005〕は、1997 年、2002 年、2004 年の内閣府の世論調査を用いて、性別役割分業意識（「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」）を支持する女性の割合が、全体では漸減傾向にあるのに対して、20 代～30 代の若年女性層では微増傾向にあることを示し、「若年女性の保守化」傾向を指摘している。

仙台圏の高校生を対象とした調査〔元治・片瀬 2008〕においては、1994 年、1999 年、2003 年のデータを用いての比較から、2003 年の調査において、男女ともに性別役割分業意識を肯定する回答が微増傾向にあることを示している。同様に、大阪、福岡で行われた高校生調査〔友枝 2009〕においても、2001 年時点よりも 2007 年時点において、性別役割分業意識への賛成割合が増加していることが報告されている。

また、長尾〔2008〕は、パネル調査の手法を用いて、個人のライフコース展望の変化を追った分析を行い、女子においては高校卒業後 3 年間で漸進的に家庭志向に傾いており、とりわけ短大進学者と高卒就職者、母親が無職であったものに多く見られる傾向があることを明らかにしている。

このように、近年における若年女性のライフコース展望やそれに関連するジェンダー意識の変化については、いずれの研究からも、家庭志向の増加や性別役割分業の支持の増加といった「保守化」現象が指摘されている。

(2) ライフコース展望の規定要因の研究

こうした若年女性のライフコース展望を規定する要因としては、これまで様々な視点から研究が積み重ねられている。

中西〔1998〕は、女子高校生と女子大学生を対象とした調査から、彼女たちのライフコース展望には、母親の就労状況や学歴、所属している教育機関のチャーター（理念、特質、文化を含む学校・大学イメージ）といった要因が関与していることを明らかにしてい

る。また、入学難易度といったアカデミックな要素の影響も一定程度確認されている。

大学生に特化したデータからは、入試の方法や現役／浪人といった入学の際の手段によるライフコース展望の分化も明らかとなっている。入試の際に競争性の高い一般入試を経て入学した女子学生は、キャリア中心のライフコースを望む割合が高く、競争性の低い推薦入試を選択した女子学生は、家庭志向の割合が高くなることが明らかとなっている〔吉原 1998、濱嶋 2002〕。競走回避といった観点からは、浪人することを避けて現役で入学できる大学に進学する「浪人忌避」といった行動にも、同様のメカニズムが働いている。

一方、意識の側面からは、性別役割分業といったジェンダーに関わる意識の女性のライフコース展望への規定力の強さが明らかにされている。性別役割分業に賛成するものは家庭志向が強く、性別役割分業に否定的なものは仕事志向である割合が高いという一貫した傾向が見られている〔吉原 1995、中井 2000、吉川 2001、元治・片瀬 2008 など〕。

(3) 社会経済状況がライフコース展望に与える影響

女性のライフコース展望への規定要因として、もう一つ重要と考えられるのが社会経済状況の影響である。

景気と女性の労働との関連についてのデータや研究からは、働く意欲を測る労働力率の変化から、単身の若年女性においては、景気後退期の雇用機会の減少や失業率の上昇によって労働力率が低下する（＝就業意欲が減退する）という動きがあることが報告されている〔樋口 1991、労働省 1999、厚生労働省 2008 など〕。

また、松田〔2009〕は、景気後退が人々の結婚・出産意欲に与える影響を分析し、経済に対する不安は、未婚者の結婚意欲を低下させ、既婚者が子どもを2人以上持つ意欲も低下させるということを明らかにしている。

一方、社会状況の変容が人々のライフコースに及ぼす影響を、ある同年齢集団(コーホート)が経験した社会的文化的状況の歴史時間軸から捉える視点を取り入れた研究も見られている〔Elder 1974=1986, Clausen 1986=1987〕。例えば、Elder〔1974=1986〕は、アメリカにおける大恐慌がその後のライフコースに与える影響を、青年期に恐慌を経験したコーホートと幼少期に経験したコーホートで比較している。その結果、幼少期に恐慌を経験したコーホートの方がより恐慌の影響を強く受けており、その後も希望をあまり持たず、自信のない傾向を示したという結果を示している。

このように、社会経済状況の影響は、人々の意識やライフコース選択に大きな影響を与えている。また、その影響は、現時点のみならず、それまでの人生を過ごしてきた社会の歴史的な文脈や社会的出来事を経験した時期（タイミング）によっても異なってくる。

(4) 分析課題

以上の先行研究を概観すると、これまでの若年女性のライフコース展望の変化を扱った研究は、主に 1990 年代半ばから 2004 年頃までのデータによるものが多く、不況のなかにある意識の変化を分析・検討したものとなっている。そのため、「失われた 10 年」といった空前の大不況を乗り越えた後、経済や就職状況が「好転」へと向かっていく時期における若年女性の意識の変化を含んだ考察には至っていない。また、2004 年以降のデータを扱った研究もわずかながら見られるが、性別役割分業意識の変化の提示に留まっている⁽²⁾。ライフコース展望を規定する要因についての分析においては、単時点における分析がほと

んどであり、社会経済状況の変化を視野に入れた経年比較を詳細に行った研究成果は、筆者の管見する限りにおいて見られていない。

そこで、本稿においては、先行研究から残された課題を解決するべく、1997年、2003年、2007年という経済状況の異なる3時点のデータを用いて、①女子学生のライフコース展望は、この10年間でどのように変化したのか。また、社会経済の変化とどのように対応しているのだろうか。②女子学生のライフコース展望を規定している要因は何か。また、その要因は10年間でどのように変化しているのか。③（上記の結果を踏まえた上で）現代の女子学生のライフコース展望と性別役割分業意識との関わりはどのようになっているのか、の3点の課題について、探索的に分析・検討する。また、前述のように、コーホートの経験する時代の効果を加味することも重要である。長期スパンで複数時点の調査結果を比較することで、社会経済の変化が若年女性の意識に与える影響がコーホートごとにどのように異なるのかを検討することができると考えられる。考察にあたっては、各調査時点の女子学生コーホートが経験した時代の特徴や時期も加味しながら議論する。

3. データと分析の枠組み

(1) 調査の概要とサンプルの構成

分析に使用するデータは、1997年、2003～2004年、2007年の3回にわたり、全国の大学の文系学部 zu 所属する大学生に対し、講義時間の一部を使った集合自記式の質問紙調査（一部持ち帰り方式、自由記述含む）として行われたものである。そのうち、3回とも調査対象となり、一定のサンプル数も確保され、比較が可能な大学は7大学となっている。今回はこの7大学のデータを使用して、3時点における経年比較を行うこととする。

本調査の有効サンプル数は、1997年調査が954名（男子384名、女子570名）、2003年調査が1,404名（男子483名、女子920名、性別無回答1名）、2007年調査が1,315名（男子484名、女子831名）となっている。調査対象大学の内訳は、国立大学が3校（関東近県2校、九州1校）、私立大学が4校（関東近県2校、関西1校、九州1校）となっている（いずれも四年制共学校）。入学難易度は上～低に幅広く分布している⁽³⁾。

(2) 使用する変数と分析の枠組み

分析に使用する女子学生のライフコース展望に関しては、「あなた自身は将来についてどのように考えていますか」という質問項目を使用する（男子学生に対しては、「結婚相手の女性の生き方」の希望として質問している）。この質問に対しては、「仕事につき、一生働き続ける（仕事志向）」、「結婚して、家事や子育てを主にした生活を送る（家庭志向）」、「自分の趣味や好きなことに打ち込む（趣味志向）」、「社会活動やボランティア活動に打ち込む（社会志向）」、「結婚相手の事情や意向に合わせる（相手志向）」、「その他」の6つの選択肢を用意し、その中から、1つを選択しての回答となっている⁽⁴⁾。

女子学生のライフコース展望の規定要因と想定される変数としては、前述の先行研究において指摘されている「入学難易度」、「親学歴」、「入試形態」、「浪人忌避」に加えて、「専攻」、「通学形態」を設定した。「専攻」については、教員養成系などといった職業に直結する専攻分野もサンプルに含まれており、こうした職業直結の専攻に所属するものと教養主体の専攻に所属するものでは、ライフコース展望も異なるものとなってくる可能性が考えられるため、変数として設定した。「通学形態」については、自宅外通学者に比べて、

自宅通学者は、「家庭」との距離が近いことや、親の庇護下にあることから、親の価値観の影響を強く受ける傾向があるものと考えられるため、自宅通学者と自宅外通学者の間では、ライフコース展望が異なる可能性を考慮して設定した。

また、今回の分析には「高校時代の活動」と「大学生活における比重」も変数

として加えている。「高校時代の活動」については、ジェンダー意識やライフコース展望との関連が既に指摘されている〔吉原 1998、濱嶋 2002、谷田川 2009〕。さらに現在の生活の影響を確認するため「大学生活における比重」も分析モデルに投入した⁽⁵⁾。

分析の手順としては、まず、1997 年、2003 年、2007 年の 3 時点における女子学生のライフコース展望の回答の変化をクロス集計表の結果から概観する。次に、彼女たちのライフコース展望を規定していると思われる各項目で分析モデルを作成し、3 時点での規定要因の変化を多項ロジスティック回帰分析で明らかにする（図 2）。さらに、現在の女子学生のライフコース展望と性別役割分業意識の関係を軸に議論を行う。

4. 分析結果

(1) 女子大学生のライフコース展望の 10 年変化

1) 男女別

まず、1997 年から 2007 年までの 10 年間におけるライフコース展望の変化を男女別に確認すると、女子学生においては、1997 年、2003 年までは、ほぼ変化のなかった「仕事志向」が 2007 年には大きく減少している（図 3）。それに反比例するように「家庭志向」は年次を追うごとに増加しており、特に 2007 年調査においては、2003 年調査より 10% 上昇している。一方で、「趣味志向」については、継続的に減少傾向にあり、「社会志向」、「相手志向」に関しては、この 10 年間で大きな変化は見られていない。

一方、男子学生が将来のパートナーに望むライフコースについては、2007 年に「家庭志向」が増加しているほかは、この 10 年で目立った変化は見られなかった。

この結果から、女子学生のライフコース展望が、この 10 年間で「仕事志向」から「家庭志向」へとシフトしたことがうかがわれる。特に、2003 年度調査を境に 2007 年度調査にかけての景気回復期にあたる 4 年間で、変化が最も顕著だった時期といえる。前述のように、若年女性において「家庭志向」や性別役割分業を支持する割合が漸増している現象

図 2 分析モデル

図 3 ライフコース展望の 3 時点変化（男女別）

は、他の調査データからも報告されていることを考え合わせると、この傾向は、本データ特有のものというのではなく、若年女性に特徴的な傾向と考えられる。

2) 属性性別（女子のみ）

ここからは、女子学生のためのデータで分析を進めていく。ここではまず、女子学生のライフコース展望の規定要因をみる前段階として、ライフコース展望を従属変数としたクロス集計表で、大学の入学難易度や学年、専攻分野など、基本的な属性項目との関連を調査時点による変化から確認していく。女子学生のライフコース展望における、この10年間の間の「仕事志向」の減少と「家庭志向」の増加といった変化は、これらの項目ごとに統制しても同様に見られる傾向なのだろうか。

結果を表1に示した。全体的には、ほとんどの属性項目において、2003年と2007年の間に「仕事志向」が減少し、「家庭志向」が増加するという動きが見られている。クロス集計表で確認する限りでは、調査時点による変化が一貫して認められている。

項目ごとに見てみると、学年別では下級学年（1-2年生）、大学ランクでは「一般大学」において、この傾向が顕著である。大学における専攻分野別では、「人文社会系」と「社会科学系」においては、「仕事志向」の減少と「家庭志向」の増加といった傾向が見られている。しかし、「教員養成系」では、「仕事志向」が増加し、「家庭志向」は微増に留まっている。教員養成のような資格と直結している専攻の女子学生は、やはり、将来は仕事を継続する意識が強いものと思われる。また、入試形態においては「推薦入学」によって大学に入学したもの、通学方法では「自宅以外」から通学しているものの「仕事志向」の減少が著しい。現役入学か浪人かといった項目においては、現役入学では2003年と

表1 属性項目×ライフコース展望（女子のみ）

		将来について							(単位: %)		
調査年度	N	将来について						合計			
		一生働き続ける つもり	結婚して 家事育児 なことを	自分の好きな ことを	社会活動や ボランティア に合わせる	相手の意向 に合わせる	その他				
学年	1-2年 **	97年	393	29.5	24.7	25.4	1.3	8.4	10.7	100.0	
	03年	685	31.5	27.7	20.7	3.2	7.4	9.3	10.0		
	07年	610	18.9	39.5	20.2	2.8	11.3	7.4	10.0		
	3-4年 **	97年	163	33.1	12.9	26.4	4.9	11.0	11.7	10.0	
	03年	220	29.1	29.1	20.9	2.7	11.8	6.4	10.0		
07年	210	28.1	33.8	17.1	1.0	12.9	7.1	10.0			
大学類型※	難関大学 **	97年	297	29.6	21.2	27.6	2.7	7.4	11.4	10.0	
	03年	600	30.8	26.7	21.5	3.2	7.5	8.3	10.0		
	07年	554	20.0	38.3	19.3	2.2	12.8	7.4	10.0		
	中堅大学 n.s.	97年	138	37.7	26.1	18.1	1.4	9.4	7.2	10.0	
	03年	159	27.7	28.9	18.9	2.5	8.9	15.1	10.0		
07年	154	28.6	36.4	16.9	1.9	7.4	11.3	10.0			
一般大学 **	97年	125	25.6	16.0	28.8	2.4	12.8	14.4	10.0		
	03年	152	34.2	23.7	20.4	3.3	14.5	3.9	10.0		
	07年	116	19.0	37.9	22.4	3.4	11.2	6.0	10.0		
	専攻	人文社会系 n.s.	97年	149	30.2	18.1	27.5	2.0	10.1	12.1	10.0
	03年	359	28.7	25.6	24.0	3.6	10.3	7.8	10.0		
07年	214	23.4	36.4	21.5	0.9	10.7	7.0	10.0			
社会科学系 **	97年	226	29.2	19.9	27.9	2.2	9.3	11.5	10.0		
	03年	262	33.2	29.0	20.2	3.1	7.1	7.4	10.0		
	07年	329	14.6	42.9	20.1	2.1	13.4	7.0	10.0		
	教員養成系 n.s.	97年	162	35.8	25.3	19.8	2.5	9.3	7.4	10.0	
	03年	146	28.1	28.8	18.5	2.1	7.5	15.1	10.0		
07年	26	38.5	30.8	15.4	3.8	11.5	0.0	10.0			
その他 *	97年	22	13.6	27.3	27.3	4.5	0.0	27.3	10.0		
	03年	48	33.3	35.4	12.5	2.1	8.3	8.3	10.0		
	07年	248	26.6	34.3	16.5	3.6	10.5	8.5	10.0		
	入試形態	一般入試 **	97年	381	33.1	19.9	26.8	1.6	9.4	9.2	10.0
	03年	503	30.5	26.6	22.5	3.2	8.0	8.1	10.0		
07年	503	23.7	38.4	20.1	1.2	10.7	6.0	10.0			
推薦など **	97年	179	25.7	24.0	22.9	3.9	8.4	15.1	10.0		
	03年	349	31.2	30.1	18.3	2.9	9.2	8.3	10.0		
	07年	317	18.0	37.5	17.7	4.1	13.6	8.1	10.0		
	通学方法	自宅 **	97年	322	28.9	21.1	27.0	2.8	9.6	10.6	10.0
	03年	580	27.4	28.6	21.7	3.6	9.3	9.3	10.0		
07年	521	19.4	37.6	20.3	3.1	10.7	8.8	10.0			
自宅以外 **	97年	238	33.2	21.4	23.5	1.7	8.4	11.8	10.0		
	03年	331	36.9	26.6	19.3	2.1	7.3	7.9	10.0		
	07年	301	24.9	38.5	17.3	1.0	13.6	4.7	10.0		
	現役or浪人	現役 **	97年	462	29.7	23.6	24.9	2.6	8.9	10.4	10.0
	03年	789	31.4	28.0	20.8	2.5	9.1	8.1	10.0		
07年	699	20.3	39.2	19.3	2.0	12.4	8.7	10.0			
浪人 **	97年	79	40.5	8.9	26.6	1.3	8.9	13.9	10.0		
	03年	92	25.0	29.3	21.7	7.6	4.3	12.0	10.0		
	07年	96	25.0	38.5	18.8	2.1	8.3	7.3	10.0		
	父学歴	阪大以上 **	97年	304	29.6	25.0	23.0	2.3	7.9	12.2	10.0
	03年	570	30.9	27.9	21.2	3.2	8.2	8.6	10.0		
07年	524	21.4	36.8	19.5	2.3	12.8	7.3	10.0			
阪大以外 **	97年	230	33.0	17.0	27.0	2.2	10.4	10.4	10.0		
	03年	276	30.8	28.6	22.1	1.8	9.4	7.2	10.0		
	07年	243	22.6	40.3	18.9	2.1	10.3	5.8	10.0		
	母学歴	阪大以上 *	97年	117	38.5	19.7	20.5	2.6	7.7	11.1	10.0
	03年	270	31.1	26.7	22.6	3.3	10.4	5.9	10.0		
07年	281	23.5	32.7	19.6	3.2	13.2	7.8	10.0			
阪大以外 **	97年	420	29.3	21.9	26.4	2.1	9.3	11.0	10.0		
	03年	580	30.9	29.0	20.7	2.4	7.2	9.8	10.0		
	07年	490	20.2	41.4	18.8	1.6	11.4	6.5	10.0		

※大学類型は代々木ミナール2009年度の入学難易度による。難関大学（A）：60以上、中堅大学（B）：59-50、一般大学（C）：49以下

2007 年の間に、浪人経験者においては 1997 年と 2003 年の間に「仕事志向」の減少と「家庭志向」の上昇が起きている。両親の学歴別で確認しても、一貫して「仕事志向」の減少と「家庭志向」の増加といった傾向が見られている。

クロス分析の結果からは、属性項目で統制しても、2003 年と 2007 年の間において、女子学生のライフコース展望の「仕事志向」から「家庭志向」へのシフトが起っており、こうした動向は調査時点の影響が大きいということが確認できる。

(2) 女子学生のライフコース展望の規定要因の変化

1) ライフコース展望の規定要因

では、女子学生たちのライフコース展望は、どのような要因によって規定されているのだろうか。ここでは、多変量解析のひとつである多項ロジスティック回帰分析⁽⁶⁾を用いて、全体の規定要因の分析を行い、さらに年度ごとの規定要因の変化を確認していく。

分析にあたっては、年次変化が主に「仕事志向」と「家庭志向」を中心に起きていることから、従属変数となる女子学生のライフコース展望の 6 つのカテゴリをグループ化し直し、「仕事志向」、「家庭志向」以外の「趣味志向」、「社会志向」、「相手志向」を集約して「その他(趣味・社会)志向」とした。独立変数には、前節で確認した属性項目に加え、過去(高校時代)の経験と現在の生活の比重に関する変数を設定した。従属変数の参照カテゴリは「仕事志向」とする。この場合の解釈は、参照カテゴリである「仕事志向」と比較して「家庭志向」や「その他志向」とのペアで、「家庭志向」、「その他志向」になる確率をみる(表 2)。なお、以下では「仕事志向」と「家庭志向」を中心に記述をしていく。

「家庭志向」の規定要因を見てみると、調査年が 2003 年、2007 年であることが「仕事志向」に比べて「家庭志向」になりやすい要因となっている。とりわけ 2007 年では、係数もプラスの方向に高い値を示しており、2007 年という時点の影響は大きいと思われる。属性項目では、推薦入試を利用して入学したもの、自宅通学をしているもののほうが「仕事志向」に比べて「家庭志向」となりやすい⁽⁷⁾。また、高校時代と現在の生活比重の項目

表 2 ライフコース展望の規定要因(多項ロジスティック回帰分析)

従属変数(参照カテゴリ: 仕事志向)	家庭志向		その他 (趣味・社会・相手) 志向	
	B	Exp (B)	B	Exp (B)
調査年 (v.s. 1997 年)	2003 年 0.293*	1.340	-0.154	0.857
	2007 年 1.028***	2.796	0.340*	1.405
属性				
専攻(社会科学) v.s. 人文社会	-0.111	0.895	-0.048	0.953
専攻(教員養成) v.s. 人文社会	0.148	1.159	-0.120	0.887
専攻(その他) v.s. 人文社会	0.155	1.168	-0.103	0.902
入学難易度	-0.218	0.804	-0.392*	0.676
入試方法(1=一般入試、0=推薦など)	-0.067	0.935	0.035	1.035
通学方法(1=自宅、0=下宿など)	-0.399**	0.671	-0.241*	0.786
現役 or 浪人(1=現役、0=浪人)	0.322**	1.380	0.445***	1.560
	0.064	1.066	-0.031	0.969
親学歴				
父学歴	0.097	1.102	0.032	1.033
母学歴	-0.164*	0.849	-0.060	0.942
過去の経験 (高校時代)				
部活動をした	0.046	1.047	0.012	1.012
異性とつきあった	0.024	1.024	-0.060	0.942
読書をした	-0.208***	0.812	-0.103	0.902
受験勉強をした	0.110	1.116	-0.050	0.951
アルバイトをした	-0.028	0.973	-0.010	0.990
ボランティアをした	0.031	1.031	-0.129*	0.879
現在の生活比重				
学業、勉強	-0.221**	0.801	-0.140*	0.869
ダブルスクール	-0.862***	0.422	-0.302**	0.739
サークル、部活動	-0.018	0.983	0.019	1.019
アルバイト	0.014	1.014	-0.081	0.923
趣味	0.017	1.017	0.329***	1.389
友人との交友	0.161*	1.175	-0.040	0.961
異性恋人との交際	0.162**	1.176	0.156**	1.169
切片		0.675		1.096*
χ^2 乗積 自由度		209.137***		50
Cox & Snell R ²		0.102		0.102
Nagelkerke R ²		0.116		0.116
N		1934		1934

*** $p<0.01$ ** $p<0.05$ * $p<0.1$

「学年」1=1 年生、2=2 年生、3=3 年生、4=4 年生

「入学難易度」1=C ランク、2=B ランク、3=A ランク

「親学歴」1=「高卒まで」、2=「短大、高専」、3=「大卒以上」

「過去の経験」1=「全然しなかった」、2=「あまりしなかった」、3=「まあした」、4=「かなりした」

「現在の生活比重」1=「ほとんどなし」、2=「少し」、3=「かなり」、4=「大部分」

では、高校時代に「読書」をしていなかったもの、現在の大学生活において「異性交際」の比重が高いもの、「学業、勉強」や「ダブルスクール」をしていないもののほうが「家庭志向」となりやすい。

以上のように、調査時点の影響は多変量解析によっても確認され、2007年という時点において、「家庭志向」となりやすいということが改めて明らかとなった。また、入試方法や通学方法、過去や現在の生活に関する項目の影響も見られており、これらが「仕事志向」と比べた際に「家庭志向」となる確率が高くなる要因となっている。

2) ライフコース展望の規定要因の変化

続いて、女子学生のライフコース展望の規定要因が、1997年、2003年、2007年の3時点でどのように変化しているのかを確認する(表3)。ここでは、年次ごとのデータで表4と同様、女子学生のライフコース展望を従属変数とする多項ロジスティック回帰分析を行った(参照カテゴリーは「仕事志向」)。

「家庭志向」を規定する要因としては、1997年調査においては、学年が低いものほど、現役で入学しているものほど、高校時代に「読書」しなかったものほど、大学生活において「ダブルスクール」をしていないものほど、「仕事志向」に比べて「家庭志向」になりやすいという結果となっている。2003年調査では、自宅通学であること、高校時代に「受験勉強」をしたものほど、しかし、大学生活においては「学業、勉強」や「ダブルスクール」をしていないものほど、「仕事志向」に比べて「家庭志向」になる確率が高くなっている。2007年調査においては、学年が低いもの、推薦入試で入学したもの、高校時代に「読書」をしなかったもの、大学生活において「ダブルスクール」をしていないものほど「家庭志向」になりやすいという結果となっている⁽⁸⁾。

規定要因の変化を概観すると、1997年、2003年においては、自宅通学、推薦入試利用での大学進学といったような女子の進学行動に特徴的である項目が有意な効果を持っている。また、「読書」経験が少ないものや、「学業」、「ダブルスクール」といった就職に有利となる知識や技術を身につけることから距離を置いているといった特徴が見受けられる。2007年になると、それらの要因に加えて、「友人との交友」や「異性交際」に大学生活の重心を置いていることが「家庭志向」になりやすい傾向を示している。また、「社会科学

表3 年度別・ライフコース展望の規定要因(多項ロジスティック回帰分析)

従属変数(参照カテゴリー: 仕事志向)	1997年						2003年						2007年					
	家庭志向			その他志向			家庭志向			その他志向			家庭志向			その他志向		
	B	Exp (B)		B	Exp (B)		B	Exp (B)		B	Exp (B)		B	Exp (B)		B	Exp (B)	
属性	学年	-0.543**	0.581	0.006	1.006		0.142	1.152	0.118	1.126		-0.304**	0.738	-0.233*	0.792		0.513	1.670
	専攻(社会科学)	0.531	1.701	-0.142	0.868		-0.554**	0.575	0.676**	1.966		-0.233*	0.792	-0.233*	0.792		0.513	1.670
	専攻(教養養成)	-0.033	0.967	-0.416	0.659		0.532	1.703	0.251	1.285		-0.601	0.548	-1.322*	0.267		0.165	0.848
	専攻(その他)	0.572	1.772	0.618	1.855		0.006	1.006	-0.794*	0.452		-0.216	0.805	-0.165	0.848		0.165	0.848
	入学経路	-0.021	0.979	0.057	1.059		-0.172	0.842	-0.021	0.980		0.067	1.069	0.114	1.121		0.114	1.121
	入試方法(1=一般入試, 0=推薦など)	-0.350	0.705	0.031	1.031		-0.438	0.645	-0.126	0.882		-0.594**	0.552	-0.649**	0.522		0.346	1.413
	通学方法(1=自宅, 0=下宿など)	0.293	1.340	0.273	1.314		0.577**	1.759	0.631**	1.889		0.067	1.091	0.346	1.413		0.346	1.413
	現役々 既入 (1=現役, 0= 既入)	1.469**	4.347	0.236	1.266		-0.408	0.665	-0.289	0.749		-0.143	0.867	-0.129	0.867		0.129	0.867
	親学歴	0.342*	1.408	0.128	1.137		-0.001	0.999	-0.069	0.933		0.063	1.065	-0.220	0.803		0.076	1.079
	母学歴	-0.300	0.741	-0.288*	0.750		-0.081	0.923	0.063	1.065		-0.220	0.803	-0.037	0.964		0.076	1.079
過去の経験 (高校時代)	部活動をした	-0.028	0.973	-0.068	0.934		0.141	1.151	-0.037	0.963		-0.008	0.992	0.075	1.078		0.075	1.078
	異性につきあった	0.002	1.002	0.097	1.102		0.153	1.165	0.086	1.090		-0.158	0.854	-0.364***	0.695		0.075	1.078
	読書をした	-0.419**	0.657	-0.198	0.820		-0.062	0.940	-0.103	0.902		-0.317**	0.728	-0.130	0.878		0.075	1.078
	受験勉強をした	-0.061	0.941	-0.185	0.831		0.215*	1.239	0.017	1.017		0.130	1.138	0.010	1.010		0.075	1.078
	アルバイトをした	-0.096	0.908	0.011	1.011		0.003	1.003	-0.085	0.918		-0.045	0.956	0.014	1.014		0.075	1.078
	ボランティアをした	0.153	1.166	-0.017	0.983		0.018	1.018	-0.191*	0.826		-0.024	0.976	-0.157	0.855		0.075	1.078
現在の生活比重	学業、勉強	-0.179	0.836	-0.114	0.893		-0.230**	0.795	-0.185	0.831		-0.229	0.795	-0.073	0.930		0.075	1.078
	ダブルスクール	-1.457***	0.233	-0.171	0.843		-0.712***	0.491	-0.307*	0.735		-0.924***	0.397	-0.500*	0.606		0.075	1.078
	サークル、部活動	-0.029	0.972	-0.046	0.955		0.041	1.042	0.041	1.042		-0.063	0.939	0.092	1.096		0.075	1.078
	アルバイト	0.062	1.064	-0.026	0.974		-0.011	0.989	-0.127	0.881		0.064	1.066	-0.018	0.982		0.075	1.078
	趣味	0.110	1.117	0.686***	1.985		-0.133	0.875	0.120	1.127		0.151	1.163	0.389***	1.452		0.075	1.078
	友人との交友	-0.258	0.773	-0.118	0.889		0.156	1.169	0.154	1.167		0.349**	1.418	-0.213	0.808		0.075	1.078
	異性恋人との交際	0.184	1.201	0.100	1.106		0.053	1.055	0.082	1.086		0.389***	1.473	0.389***	1.473		0.075	1.078
	切片	2.268		0.475			0.195		1.006		1.989		1.421				0.075	1.078
	X ² 準値		98.432***					76.755***							106.318***			
	自由度		46					46							46			
	Cox & Snell R ²		0.183					0.094							0.147			
	Nagelkerke R ²		0.208					0.106							0.167			
	N		488					778							698			

***p<0.01 **p<0.05 *p<0.1
「学年」1=1年生、2=2年生、3=3年生、4=4年生
「入学経路」1=一般入試、2=推薦入試、3=ダブルスクール、4=その他
「入試方法」1=一般入試、2=推薦入試、3=ダブルスクール、4=その他
「通学方法」1=自宅、2=下宿、3=通学、4=その他
「現役々 既入」1=現役、2=既入、3=その他
「親学歴」1=「専攻まで」、2=「専攻、高専」、3=「専攻以上」
「過去の経験」1=「専攻まで」、2=「専攻、高専」、3=「専攻以上」
「読書」1=「専攻まで」、2=「専攻、高専」、3=「専攻以上」
「受験勉強」1=「専攻まで」、2=「専攻、高専」、3=「専攻以上」
「アルバイト」1=「専攻まで」、2=「専攻、高専」、3=「専攻以上」
「ボランティア」1=「専攻まで」、2=「専攻、高専」、3=「専攻以上」
「現在の生活比重」1=「専攻まで」、2=「専攻、高専」、3=「専攻以上」
「友人との交友」1=「専攻まで」、2=「専攻、高専」、3=「専攻以上」
「異性恋人との交際」1=「専攻まで」、2=「専攻、高専」、3=「専攻以上」

系」の専攻分野であることも「家庭志向」になる確率を高めている。1997 年度、2003 年度に比べ、2007 年度調査においては、社交的で恋愛にも積極的な女子学生が「仕事志向」よりも「家庭志向」になりやすくなっている。

今回の分析においては、「親の学歴」は、女子学生のライフコース展望にあまり大きな影響を与えていないことにも注目できる。1997 年データの「その他志向」においては弱いながらも母親の学歴の効果が確認されるが、2003 年以降は父親、母親の学歴のいずれも有意な効果は見られない。また、入学難易度についても同様のことがいえる。女子学生のライフコース展望は、親の学歴や入学難易度といった属性よりもむしろ、高校時代の経験や入試形態、学生生活の送り方によって規定されているといえるだろう。

(3) 現代の女子学生のライフコース展望と性別役割分業意識

これまで、3 時点のデータを用いて、女子学生のライフコース展望とその規定要因の経年比較を行ってきたが、性別役割分業に関する項目との関連は未確認であった。今回使用した大学生調査のデータにおいて、性別役割分業意識に関する質問項目は、2004 年に実施した 2003 年調査の追加調査と 2007 年調査のみに入れてあるため、今回の経年比較という研究目的上、分析モデルに入れることができなかった。しかし、これまでも性別役割分業への賛否と女子学生のライフコース展望には強い関連があることが指摘されてきた〔吉川 2001、元治・片瀬 2008 など〕ため、経年比較はできない⁽⁹⁾が、07 年データのみで、女子学生のライフコース展望と性別役割分業意識の関係を確認する（図 4）。

全体的には性別役割分業に対して反対しているものは賛成しているものより「仕事志向」の割合が高く、性別役割分業に対して肯定的なものは「家庭志向」の割合が高いという結果となっている。本調査の 2007 年データからも、先行研究と同様、性別役割分業意識とライフコース展望の強い関連を指摘することができる。しかし、詳細に見ていくと、性別役割分業に賛成している女子学生が「仕事志向」である割合は 3% 前後と少ないのに対して、性別役割分業に反対しているものの 3 割近くが「家庭志向」であることに注目できる。こうした動きは、仙台圏の高校生調査にも見られており、近年の若者たちが、性別役割分業の権利（＝経済活動はしない）はそのままに受け入れ、義務（＝家事育児は分担）は放棄するといった「おいしいところ取り」を志向する傾向が指摘されている〔多賀 2005、元治・片瀬 2008〕。また、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべき」といった設問に対しては、男女平等の考え方の普及のもと、それに反対することが「常識化」されており、ジェンダーに関する意識の保革は把握しづらいとの指摘もあり〔尾嶋 2002、長尾 2008〕、今後はこうした点も含めた精査が必要である。

5. まとめ

本稿では、この 10 年間における女子学生たちのライフコース展望とその規定要因の変

図 4 性別役割分業への賛否とライフコース展望（2007 年データのみ）

化を、経済状況といった社会構造的な側面と性別役割分業といった意識の側面の双方から分析を行ってきた。その結果、以下の3点の知見が得られた。第1に、この10年間の女子学生のライフコース展望は、2003年と2007年の間に「仕事志向」の減少と「家庭志向」の増加といった変化が起きていることである。特に、2007年度という調査時点は、多変量解析によっても有意な効果を持っており、女子学生の「仕事志向」から「家庭志向」へのライフコース展望の変化は、時点の影響が大きいと考えられる。第2に、女子学生のライフコース展望の規定要因の経年変化では、1997年、2003年に比べて、2007年において「友人との交友」や「異性恋人との交際」に比重を置いている女子学生が「仕事志向」に比べて「家庭志向」になりやすい傾向を示しており、近年においては、社会的で恋愛にも積極的な女子学生ほど「家庭志向」であることが確認された。第3に、2007年データからは、性別役割分業意識とライフコース展望の間に強い関連があることが改めて確認された。しかし、性別役割分業に反対している女子学生の3割が「家庭志向」を希望しているという傾向も同時に見られており、この意識のギャップも注目される結果である。

さて、以上の知見からは何が言えるだろうか。まず、1997年、2003年の不況期よりも2007年といった景気上昇期において、女子学生のライフコース展望における「家庭志向」が増加していることについては、これまでの若年女性の「保守化」といった現象が、長期不況によるものであるといった単純な解釈に対して、一定の留保を要請するものとなる。1992年から約10年間続いたこの不況は、いずれのコホートとも経験しているはずである。にもかかわらず、あらゆる属性項目の影響を考慮してもなお、好景気であった2007年時点における「家庭志向」の増加が顕著に確認された。女子学生の「家庭志向」の高まりは、就職率の上昇には反応せず、経済状況から独立した現象であったといえる。

このような調査時点の影響の強さは、コホートの特性の違いといえるだろう。前述のとおり、人々のライフコース選択に与える社会経済状況の影響は、それまでの人生において、それを経験した時期によっても異なってくる。2007年度調査対象者のコホートは、バブル景気とその後の空前の不況を目の当たりにし、自身も就職氷河期を経験した1997年度調査のコホートや不況期に思春期を送った2003年度調査コホートと比べると、物心がついた時には「失われた10年」という長期不況の最中であり、10代半ばまでを不

況期の中で過ごした世代である(表4)。男女雇用機会均等法が施行され、大学生の就職状況が売り手市場であったバブル期の背中が見える時代に育った1997年コホートが、

表4 調査時点別コホートの時代経験(社会経済状況)

		97年調査対象者	03年調査対象者	07年調査対象者
生年		1975~1979年ごろ	1981~1985年ごろ	1985~1989年ごろ
年齢(2010年時点)		31~35才	25~29才	21~25才
社会経済状況	バブル景気(1986~1991年)	小学生~中学生	幼児~小学生	誕生~幼児期
	「失われた10年」(1992~2002年)	高校生~大学生	中学生~高校生	小学生~中学生
	景気回復期(2003年~2007年)	20代半ば~30才前後	大学生~20代半ば	高校生~大学生

※1 調査対象者は大学1~4年生が中心であるため、対象者の年齢には4年程度の幅を持たせている
 ※2 網掛けは調査時点

不況期においては「手に職」といった「仕事志向」で安定を手に入れようとしたのに対し、2007年コホートは先の見えない低成長時代に育っており、大学入学前後に好景気の到来を経験するも「フリーター、ニート」といった若年層の非正規雇用問題が浮上した時期とも重なったため、職業を通じての安定に現実味を見出せなかった可能性が考えられる。また、女性の就労という側面から見ても、男女雇用機会均等法の施行から20年が経過し、結婚後も女性が働くことが当たり前であるという認識を持った世代からすると、家庭中心

の生き方は新鮮に感じられるだろう。加えて、家庭と仕事の両立に苦労している前の世代の姿も同時に見ているため、結婚後は配偶者の扶養のもとでのんびり暮らすことを希望する割合が高くなっている可能性もある。本稿のデータからは、近年になるにつれて「家庭志向」になりやすい女子学生が、社交的で恋愛にも積極的なタイプへと変化している。また、性別役割分業意識に否定的でありながら「家庭志向」を希望するものも多く見られている。このことを考え併せると、近年における若年女性の「家庭志向」の増加は、決して伝統回帰的な意味を持つ「保守化」ではなく、生まれたときから経済の低成長時代を生きてきたコーホートが、時代に適応した結果の意識特性から生じた現象といえるのではないだろう。

2009 年現在、経済状況は再び悪化に転じ、大学生たちの就職状況にも影響を及ぼしている。若者にとって厳しい時代は続いている。継続した調査を行い、彼女たちの意識の変容を注意深く見ていくことが必要であろう。今後の課題としたい。

註

- (1) 日本においては、結婚・出産による女性の離職（「M 字型カーブ」）が問題とされてきた。近年においては、結婚よりも出産・育児が女性の就業継続を難しくしている要因といわれている〔元治・片瀬 2008、労働政策研究・研修機構 2007〕。
- (2) 片桐〔2009〕の調査結果においては「生まれ変わったら男性になりたいか／女性になりたいか」との問いに対する回答傾向に関して、就職率や景気変動と関連付けて、就職状況が良いときには男性として（仕事に）生きることが魅力的になるという考察を行っている。
- (3) サンプルの詳細は下表のとおりとなっている。

附表 サンプルの概要

府県別・学部の設置																											
大学名	A 大学			C 大学			D 大学			F 大学			G 大学			J 大学			L 大学			合計					
設置形態	国立			国立			国立			私立			私立			私立			私立								
地区	東京			関東			九州			東京			関西			東京			九州								
入学難易度	A			B			B			A			A			C			C								
調査年度	97	03	07	97	03	07	97	03	07	97	03	07	97	03	07	97	03	07	97	03	07	97	03	07			
N	84	114	84	87	117	169	147	99	67	202	399	337	201	433	442	114	111	70	119	131	146	954	1404	1315			
性 別	男			女			男			女			男			女			男			女					
1 年	0	0	0	67	83	85	52	85	51	25	173	82	0	91	170	0	23	17	13	0	78	157	465	483			
2 年	65	104	73	13	24	7	65	4	10	109	116	151	105	159	164	53	64	31	82	93	41	492	564	477			
3 年	15	5	5	2	5	60	18	7	5	50	58	71	71	158	71	51	19	22	12	26	17	219	278	251			
4 年	3	4	3	5	5	15	10	0	1	16	47	28	23	22	33	10	5	0	10	10	10	77	93	90			
その他	1	1	3	0	0	2	0	3	0	2	5	4	2	1	4	0	0	0	2	2	0	7	12	13			
専 攻	人文社会系			社会科学系			教育養成系			その他			人文社会系			社会科学系			教育養成系			その他					
28	15	45	15	0	0	0	0	4	0	129	305	163	0	0	0	25	110	40	65	46	67	234	510	285			
29	22	12	1	4	1	2	0	2	42	54	61	200	425	438	75	1	9	54	74	50	402	580	573				
28	3	0	0	86	105	0	142	94	0	16	1	6	0	0	0	5	0	5	0	1	24	277	204	35			
その他	13	39	53	0	7	168	2	1	65	14	39	103	1	4	2	8	0	11	0	5	3	38	95	405			

※入学難易度は、代々木ゼミナールのホームページ記載の 2009 年度大学入試難易度を使用し、A：60 以上、B：59～50、C：49 以下とした。
 ※数字は全て実数。無回答は除く
 ※数字は全て実数。無回答は除く

- (4) これらの選択肢を組み合わせることができない構造となっているため（例えば「家庭と仕事の両立」など）、回答者は「将来最も重視したいライフスタイル」を 1 つ選んでいるものと思われる。よって、「家庭志向」を単純に「専業主婦志向」とはいえないということには留意が必要である。
- (5) 「高校時代の活動」と「大学生活における活動」には連続性があることも指摘されている〔岩田 1999、武内 2003〕。
- (6) 多項ロジスティック回帰分析は 3 つ以上のカテゴリの中から、任意の 1 つのカテゴリを基準とし、その他の事象が起こる確率を予測するものである。今回の分析の場合、「家庭志向」の発生する確率を P_1 、「その他志向」が発生する確率を P_2 、基準カテゴリである「仕事志向」を P_j とすると「仕事志向」に対する「家庭志向」の発生確率 (P_1/P_j)、「その他志向」の発生確率 (P_2/P_j) をそれぞれ対数変換し、それぞれを $X_1, X_2 \dots X_n$ 等の説明変数で予測する。
 式で表すと $\log(P_i/P_j) = b_0 + b_1X_1 + b_2X_2 + \dots + b_nX_n$ ($i=1, 2, \dots, j-1$) となる。
- (7) 入試方法については、これまでも、男子よりも女子の推薦入試選択率が高いことやその理由として浪人忌避や競争回避といった意識が存在すること、推薦入試選択者の家庭志向の強さなどが指摘されてきている〔吉原 1998、濱嶋 2002〕。

- (8) 大学における活動とライフコース展望との因果関係については、同時決定や因果関係が逆転している可能性も考えられるが、本稿においては、注6に示したように、高校時代の活動と大学生時の活動には連続性が認められるという先行研究の知見を前提として、大学生生活の各項目を独立変数として扱っている。変数間の因果関係については、引き続き調査項目の検討も含めて精査していく必要がある。
- (9) 2004年度に行った2003年度の追加調査については、サンプルとなる大学が2003年度調査と異なるため、経年比較の対象とすることはできないが、2004年調査のみのデータを用いた分析からは、リベラルなジェンダー意識を持つ女子学生においては、「一生働く」は44%にとどまり、「結婚して家事育児」が12.9%、「好きなことをしたい」が21.1%であることが報告されている〔谷田川2007〕。

文献

- Clausen, John A. 1986 *The Life Course: A Sociological Perspective*. 佐藤慶幸・小島 茂 (訳)『ライフコースの社会学』早稲田大学出版部 1987.
- Elder, Glen H. 1974 *Children of the Great Depression: Social Change in Life Experience*. 本多時雄・川浦康至 ほか (訳)『大恐慌の子どもたち 社会変動と人間発達』明石書店 1986.
- 元治恵子・片瀬一男 2008「性別役割意識は変わったか——性差・世代差・世代間伝達——」片瀬一男・海野道郎 (編)『〈失われた時代〉の高校生の意識』有斐閣 pp. 119-142.
- 濱嶋幸司 2002「女子学生の通過した選抜と将来志向——高学歴女性の意識分化形成に関する一考察——」『上智大学社会学論集』26: 77-95.
- 樋口美雄 1991『日本経済と就業行動』東洋経済新報社.
- 岩田弘三 1999「学生文化形成についての大学間比較に関する研究」『大学教育研究』7: 1-19.
- 片桐新自 2009『不安定社会の中の若者たち——大学生調査から見るこの20年』世界思想社.
- 吉川 徹 2001「ジェンダー意識の男女差とライフコース・イメージ」『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房, pp. 107-126.
- 厚生労働省 2008『平成20年度版 働く女性の実情』.
- 松田茂樹 2005「性別役割分業意識の変化——若年女性に見る保守化のきざし——」『LifeDesign Report』2005年9月号, pp. 24-26.
- 松田茂樹 2009「不況と少子化——景気後退によって結婚・出産意欲は低下するのか——」『LifeDesign Report』2009年7月号, pp. 16-27.
- 長尾由希子 2008『若年男女における性別役割分業意識の変化とその特徴：高校生のパネル調査から』（東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズ No. 12）東京大学社会科学研究所.
- 中井美樹 2000「若者の性役割観の構造とライフコース観および結婚観」『立命館産業社会論集』36(3): 117-127.
- 中西祐子 1998『ジェンダー・トラック——青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』東洋館出版社.
- 尾嶋史章 2002「「理念」から「日常」へ——変容する性別役割分業意識——」『日本の階層システム4 ジェンダー・市場・家族』東京大学出版会, pp. 217-236.
- 労働政策研究・研修機構編 2007『仕事と生活——体系的両立支援の構築に向けて』第1期中期計画プロジェクト研究シリーズ No. 7.
- 労働省 1999『平成11年度版 労働経済の分析』.
- 多賀 太 2005「ポスト青年期とジェンダー」『教育社会学研究』76: 59-75.
- 武内 清編 2003『キャンパスライフの今』玉川大学出版部.
- 友枝敏雄編 2009『現代の高校生は何を考えているのか——意識調査の計量分析をととして——』世界思想社.
- 山田昌弘 2009『なぜ若者は保守化するのか——反転する現実と願望』東洋経済新報社.
- 谷田川ルミ 2007「現代の大学生のジェンダー意識」『現代大学生の生活と文化——学生支援に向けて——』平成16~18年度文部科学省研究補助金最終報告書, pp. 58-69.
- 谷田川ルミ 2009「伝統的なジェンダー観を支持する女子大学生の特性」『上智大学教育学論集』43: 97-110.
- 吉原恵子 1995「女子大学生における職業選択のメカニズム——女性内分化の要因としての女性性——」『教育社会学研究』57: 107-124.
- 吉原恵子 1998「異なる競争を生み出す入試システム——高校から大学への接続にみるジェンダー分化——」『教育社会学研究』62: 43-67.

(上智大学大学院総合人間科学研究科教育学専攻 博士後期課程 yata@fork.ocn.ne.jp)